

与謝野晶子 訳

源氏物語

蜻蛉卷



一冊堂青空文庫

源氏物語

蜻蛉

紫式部

與謝野晶子訳

ひと時は目に見しものをかげろふのあ
るかなきかを知らぬはかなき（晶子）

宇治の山莊では浮舟うきふねの姫君の姿のなくなったことに驚き、いろいろと捜し求めるのに
努めたが、何のかいもなかった。小説の中の姫君が人に盗まれた翌朝のようであつて、
このいたましい騒ぎはくわしく書くことができない。

京からの前日の使いが泊まって帰らなかったため、母夫人は不安がつてまた次の使い
をよこした。まだ鶏の鳴いているころに出立たせたと云っている使いにどうこの始末を
書いて帰したものであろうと、乳母めのとをはじめとして女房たちは頭を混乱させていた。何
のわけでどうなったかと推理してゆくことができずに、ただ騒いでいる時、浮舟の秘密

に關与していた右近うこんと侍従だけには最近の姫君の悲しみよう、煩悶はんもんのしよの並み並みでなかったことから、川へ身を投げたという想像がつくのであった。泣く泣く夫人の送ってきた手紙をあけて見ると、

あまりにあなたが心配で安眠のできないせいでしょうか、今夜は夢の中であなたを見ることがよくできないのです。眠ったかと思うと何かに襲われて苦しむのです。そんなことで気分もよろしくなくて困ります。移転される日の近くなったことは知っていますが、それまでの間をこの家へあなたを来させていたく思います。今日は雨になりそうですからだめでしょうが。

と書かれてあった。昨夜浮舟の書いた返事もあけて読みながら右近は非常に泣いた。こんな覚悟をしておいになつたので心細いようなことをお言いになつたのである、小さい時から少しの隔てもなく親しみ合つた主従ではないか、隠し事は塵ちりほどもなかった間柄ではないか、それだのに最後に自分をおうとみになり自殺の氣けぶりもお見せにならなかったのは恨めしいと思うと、泣いても泣いても足らず足摺あしずりということをしてもらえてるのが子供のようであった。悲しんでいたことにはよく氣はついていたのであるが、自殺などという恐ろしいことの決行できる方とは見えず、優しい柔らかな心の持ち

主だったではないかと、まだ事実を事実として信じることができずにただ悲しいばかりの右近であった。乳母はかえってはげしい驚きのために放心して、

「どうすればいいだろう、どうすれば」

とばかり言っているのである。

兵部卿ひょうぶきやうの宮も普通でない気配けはいのある返事をお読みになったため、どんなふうな氣になっ
ているのであろう、自分を愛していることは確かであるが、移り氣であると自分の
言われていることに疑いを持つていたから、大将の手へ行くのではなくどこともなく行
くえをくらまそうとするのではあるまいか、と不安でならずお思いになって使いをお出
しになった。

使いが来てみると家の中は女の泣き叫ぶ声に満ちていてお手紙を受け取ろうとする者
もない。どうしたことかと下しもの女中に聞くと、

「姫君が昨晚にわかにお亡かくれになりましたので、女房がたはだれも氣を失ったようにな
っていらつしやるのですよ。御用をお取り次ぎしましてもだめでしょう」

と言った。何の事情も知らぬ男であったから、くわしく聞くこともせずに帰ってま
いった。そして山莊の出来事を取り次ぎによっておしらせしたのであった。宮は夢とよ

りお思われにならない。ひどく病をしているというふうでもなく、いつも気分がすぐれぬとは書いてあったが、昨日きのうの返事にはそれも書かず、平生のものよりも情の見えることを言つて来たではないかと不思議にばかりお思われになって、時方ときかたに自身で宇治へ行き確かかなことを調べて来るようにお命じになった。

「あの大將のお耳にどんなことがはいつたのですか、宿直とのいをする者が忠実に役を勤めなえ、見つけますと調べ立てるようなことをする者らがあるそうなのですから、口実なしに私が行きまして、それが大將さんへ知れますとあなた様の御迷惑になることが起こるのではございませんでしょうか。そしてまた人が急病でお死になつた所などというのもはおおぜいの人が集まってもいるでしょうから」

「だからといって、訳のわからぬままにしておけるものではない。何とか口実を作つて行つて、こちらの味方になつてゐる侍従などに逢つて、真相を確かめて来てくれ。どんなことをこういうふうと言つてゐるかをね。下人というものはよくまちがつたことを聞いて来たりするものだから」

こう仰せられる宮の御様子においたましいところの見えるのももったいなくて時方は

その夕方から宇治へ出かけた。この人たちが急いで行けば早く行き着くこともできるのであった。少し降っていた雨はやんだが泥濘ぬかるみの路みちにつかれていたし、はじめから侍風に装っていたのであるし、目だつこともなく門をはいることのできた山莊の中は混雑していた。今夜のうちにお葬儀をしてしまうのであるなどと皆の言っているのを聞いて時方はひどく驚かされた。右近に面会を求めたが逢えない。

「何が何やらわからぬふうになっていまして、起き上がる力もないのです。夜分おそくにでもなりましたらおいでくださいませ。お目にかかれませんが残念でございます」と取り次ぎをもって言わせた。

「そうではありましようが、こちらの御事情がわからぬままでは帰りようがありません。もう一人の方にでも逢わせてください」

時方がせつに言ったために侍従が出て来た。

「とんだことになりました、だれも想像のできませんようなふうでお亡なくなりになったものですから、悲しいなどと申す言葉では私どもの心持ちは出てまいりません。夢のようぼうぜんに思ひまして、だれも皆呆然としておりますとだけ申し上げてくださいませ。少しこうしました気持ちの納りますころになれば、その前にどんなに煩悶ぼんもんをしておいでになり

ましたかと申すことや、あの宮様のおいであそばした晩に心苦しく思召おぼしめした御様子などもお話し申し上げることが出来るかと思ひます。触穢しよくえの期間の過ぎました時分にもう一度またお立ち寄りください」

と言つて侍従ははげしく泣く。奥のほうにも泣き声が幾いろにも聞こえて、乳母らしく思われる声で、

「お姫様どこへいらつしやいました。帰つておいでくださいませ。御遺骸いがいさえ見られませんとはなんたる悲しいことでしょう。毎日毎日拝見しても飽くことのないあなた様でした。そのあなた様の御幸福におなりになるのを祈りますことで生きがいのあるあなた様はございませんか、それにあなた様は打ちやつてお行きになりまして、どこへ行つたとはございませんか、それにあなた様を取り込めてしまうことはできないはずでも知らせてくだらない。鬼神でもあなた様を取り込めてしまうことはできないはずです。人が非常に惜しむ人は帝釈天たいしゃくてんも返してくださるものです。お姫様を取つたのは人にもせよ鬼にもせよ返しに来てください。御遺骸だけでも見せてほしい」

こう叫んでいるうちに不審な点のあるのに氣のついた時方は、

「真相を知らせてください。だれかがお隠しになつたのですか。確かに知りたく思召して、御自身の代わりにおよこしになつた私は使ひです。今ははっきりしないままでも事

は済むでしょうがあとでほんとうのことがお耳にはいった節、御報告が違っていたものでしたら使いの罪になります。まただれだれに逢えと、御好意を持つものと思召して御名ざしになったのに対しても相済まぬこととお思ひになりませんか。一人の女性に傾倒される方は外国の歴史などにもありますが、宮様のあの方への御熱愛ほどのものはこの世にもう一つとはないと私は拝見しているのです」

と言った。道理なこと、この場合の宮の御感情はさこそと恐察される、隠しても姫君の普通の死でない噂は立つことであろうから、今申し上げておくほうがよいと侍従は思い、

「だれかがお隠したかという疑いも起こることでしたなら、こんなふうに家じゅうの人が悲しみにおぼれることもないでしょう。お悲しみになつてめいっただふうになつていらつしやいましたところに、殿様のほうから少しめんどうなふうの仰せがあつたのです。お母様である方も、あのわめいております乳母なども初めからの方へ迎えられておいでになりますことの用意に夢中でしたし、宮様のお志に感激しておいでになりました姫君の思召しはまた別でしたから、それでお頭が混乱してしまつたのでしよう、思いも寄らぬことになりました心身ともに失つておしまいになつたので、あの乳母のようなむちや

な叫びもされるのですよ」

さすがに正面から言おうとはせずにほのめかしていることのあるのを内記も知った。

「それではまたお静かになつてから改めて伺いましょう。立ちながらの話にしてはあまりに失礼なことになります。そのうち宮様御自身でもおいでになることになりましよう」

「もつたいない、それはいけません。今になりましたいっさいの秘密の暴露してしまいますことは、お亡^なくなりになりました方のためにあるいは光栄なことかも知じませんが、十分隠したく思召したことですから、秘密は秘密のままにしてお置きくださいましようが御好志になります」

などと侍従は言い、姫君の最後が普通の死でないことをほかへ洩^もらすまいとしていても、自然に事実は事実として人が悟つてしまうことであろうと思い、こんな会談を長くしていることも避けねばならぬと思う心から時方を促して去らしめた。

雨の降る最中に常陸夫人^{ひたち}が来た。遺骸があつての死は悲しいといつても無常の世^{おきて}にては、どれほど愛していた人でもある時は甘んじて受けなければならぬのが人生の掟であるが、これは何と思いあきらめてよいことかと悲しがった。苦しい恋の結末をそうし

てつけたことなどは想像のできぬことで、身を投げたなどとは思ひ寄ることもできず、鬼が食ってしまったか、狐きつねというようなものが取って行つたのであろうか、昔の怪奇な小説にはそんなこともあるがと夫人は思うのであった。また常に恐れている大将の正妻の宮の周囲に性質の悪い乳母というような者がいて、薫かおるが浮舟をここへ隠して置いてあることを知り、だまして人につれ出させるようなことがあつたのではあるまいかと、召使いに疑いをかけて、

「近ごろ来た女房で氣心の知れなかつたのがいましたか」と問うた。

「そんなのはあまりにこちらが寂しいと申していやがりまして、辛抱しんぼうもできませんで、京へお移りになればすぐにまいりますというような挨拶あいさつをしまして、仕事などだけを引き受けて持つて帰つたりしまして、現在ここにいるのはございません」

答えはこうであつた。もとからいた女房も実家へ行つていたりして人数は少ない時だつたのである。侍従などはそれまでの姫君の煩悶を知つていて、死んでしまいたいと言つて泣き入つていたことを思い、書いておいたものを読んで「なきかげに」という歌も硯すずりの下にあつたのを見つけては、騒がしい響きを立てる宇治川が姫君を呑のんでしまつ

たかと、恐ろしいものとしてそのほうが見られるのであった。ともかくも死んでおしまいになった人が、どこへだれに誘拐ゆうかいされて行っているかというように疑われているのは気の毒なことであると右近と話し合い、あの秘密の関係も自発的に招いた過失ではないのであるから、親である人に死後に知られても姫君として多く恥じるところもないのであると言ひ、ありのままに話して、五里霧中に迷っているような心境をだけでも救いたいと夫人を思い、また故人も遺骸を始末するのが世の常の営みなのであるから、そのまま空で悲しんでばかりいることをしては日が重なるにしたがい秘密は早く世の中へ知られてしまうこともある、その体裁も相談して作るほうがよい、どうしても真実を母夫人に知らす必要があるとして、ひそかに兵部卿の宮との関係、そのうち大將に秘密を悟られて姫君が煩悶した話をするのであったが、語る人も魂が消えるようになり、聞く人もさらに予期せぬ悲哀の落ち重なってきたためきをどうすることもできないふうであった。それではこの荒い川へ身を投げて死んだのかと思うと、母の夫人は自身もそこへはいってしまいたい気を覚えた。流れて行つたほうを捜させて遺骸だけでも丁寧に納めたいと夫人は言いだしたが、もう大海へ押し流されたに違いない、効果は収めることができずに人の噂だけが高くなることははばからなければならぬことを二人は忠告し

た。どうすればよいかと思うと胸がせき上がってくる気のする常陸夫人は、どうと定め
ることもできずに茫^{ぼう}としてゐるのを二人がたすけて、車を寄せさせて姫君の常に坐^ざして
いた敷き物、身近に置いた手道具、もぬけになつていた夜具などを入れ、乳母の子の僧
と、その叔父^{おじ}にあたる阿闍梨^{あじやり}、そのまた親しい弟子^{でし}、もとから心安い老僧などで忌中
を籠^{こも}ろうとして来ていた人たちなどだけに真実のことを知らせ遺骸のあつてする葬式の
ように繕^{つくろ}わせて出す時、乳母は悲しがって泣き転^{まろ}んだ。宇治の五位、その舅^{しゅうと}の内舎人^{うちとねり}な
どという以前^{おと}に嚇^{おど}しに來た人たちが來て、

「お葬式のことは殿様と御相談なすつてから、日どりもきめてりつぱになさるのがよろ
しいでしょう」

などと言つていたが、

「どうしても今夜のうちにしたい理^{わけ}由があるのです、目だたぬようにと思ふ理由もある
のです」

と言ひ、その車を川向かいの山の前の原へやり、人も近くは寄せずに、真実のことを
知らせてある僧たちだけを立ち合わせて焼いてしまった。火は長くも燃えていなかっ
た。田舎^{いなか}の人はこうした作法はかえつて都人より大事にするもので、そしてこの場合の

縁起を言ったりすることもうるさいほどにするものであったから、大家の夫人の葬儀とも思われぬ貧弱な式であったと譏^{そし}る人があったり、また側室であった人の場合はこんなふうにして済まされるのが京の風俗であるなどと言ったり、いずれにもせようれしくない取り沙汰^{ざた}を人はした。そうした階級の人がどう思ったかということさえもつましいこの場合に、大將が遺骸も残さず死んだと聞いては必ずどこかへ失踪^{しっそう}をしてしまったことと疑うであらうし、親族関係の濃い宮様のほうへその話の伝わってゆかぬはずもない、その時に宮がお隠しになったと大將は思うまい、どんな人が隠しているかと思いい像もされるに違いない、生きていた間は高い貴人たちに愛される運命を持った人が、死後に醜い疑いをかけられるのはもつてのほかであると女房らは思い、山莊の中の下人たちにも今朝^{けさ}姫君の姿の見えなかった騒ぎに、思わずも実相を悟らせることになった者らへは口堅めを嚴重にし、知らなかったのにはあくまでも普通の死であったように取り繕うことに侍従と右近は骨を折った。時間がたったのちには浮舟の姫君が死を決意するまでの経過を宮へも大將へもお話しすることができようが、今は興ざめさせるような死に方を人の口から次へ次へと聞こえることは故人のために気の毒であると思い、この二人が自身らの責任を感じる心から深く隠すことに努めた。

この時に薫は母宮が御病氣におなりになって石山寺へ参籠さんろうをあそばされるのに従って行っていて騒がしく暮らしていたのであった。京よりもまだ遠くにいて宇治のことが気がかりでならぬ薫でもあったが、はかばかしく消息をする人もなかったために、葬儀にも大將家の使いの立ち合わなかったのは山莊の人々の情けなく思うところであったが、莊園の人が石山へ行つてはじめて姫君の死は薫へ報じられたのであった。使いはその翌日の早朝に宇治へ来た。

非常なことの起こつたしらせを受け、すぐにも自分で行くべきですが、母宮の御病氣のために日数をきめて籠こもっているために、それも実行ができません、昨夜にもう葬送を行なつたというのですが、なぜそれは私へ相談をしませんでしたか、そして日を延べることが普通ではありませんか。しかも簡単に儀式をしてしまったと聞いて残念に思います。どうしてももうしても同じことですが、一人の人間の最後の式ですから、田舎いなかの人たちの譏そしりを受けたりすることになつては、自分のためにも迷惑です。と、あの親しく思っている大蔵大輔たゆうを使いにして言わせたのであった。使いの来たことでまた悲しみが新しくなつたし、答える言葉も何と言つてよいかわからぬ時であつてみれば、人々は泣くのを挨拶あいさつに代えて何とも申し出すことはできなかった。

薫は思いがけぬ愛人の死に落胆をして、情けない場所である、幽鬼などが住んでいて
そうした災厄さいやくをしばしば起こすのでなからうか、それと気もつかずにどうして長く宇治
などへ置いていたのだろう、不快な関係がほかに結ばれたらしいことなども、ああした
不用心な所へ住ませておいたために隙すきをうかがわせることになったに違いない、と思わ
れるのも皆自分の非常識に原因したことであると胸が痛くなるほどにも悔まれた。御病
気で専念に仏へ祈っておいになる母宮のおそばでこんな煩悶はんもんをしているのはよろしく
ないと思い薫は京の邸やしきへ帰った。夫人の宮のところへは行かずに、

「たいしたことではないのですが、身辺に不幸が起こったものですから、しばらく落ち
着きますまで、縁起の悪いことにもなりますから謹慎していようと思います」

などと御挨拶をしておいて、一人で人生の深い悲しみを味わっていた。浮舟うきふねの容姿の
愛嬌あいきょうがあつて、美しかったことなどを思い出すと、非常に恋しくなり、悲しくなる薫
は、その人の生きていた時には、それをそうと認めようとはせずに、たびたび逢いに行
こうともせず、寂しい思いばかりをさせて来たのであろうと思う後悔があとからあとか
らわいてくる。恋愛について物思ひの絶えない宿命をになっている自分である、信仰生
活を志していながら俗から離れずにいるのを仏が憎んでおいでになるのであるのか、悟

らせようとしての方便には未来の慈悲を隠してこんな残酷な目も仏はお見せになるものであると、思い続けて仏勤めをばかりしていた。

浮舟をお失いになった兵部卿の宮は、まして二、三日は失心したようになっておいでになったため、どうした物怪もののけが憑ついたかと周囲の人たちが騒いでいるうちに、ようやく涙が流れ尽くしてお心が静まってきたと同時に、生きていた日の浮舟が恋しくばかりお思い出されるのであった。他人には重く病氣をしているふうを見せて、亡なき恋人を思う悲歎に沈んでいることは知らせないものであると、御自身では思召したが、自然御様子にそれが現われるものであるから、どんなことにお出逢いになって、こんな命もあぶないまでに悲しんでおいでになるのであるという人もあるために、大将もそれを知り、故人とは自分の想像したような関係を作っておいでになったらしい、手紙をおやりになったりするだけのことではないのであった、宮が御覧になれば必ず深い愛着をお覚えになるはずの人であった、生きていたならば自分は裏切られた男としての醜名を取らなければならぬのであったと、こう思うようになってからは少し故人へのあこがれがさめた気のする薫であった。

兵部卿の宮の御病氣見舞いに伺候せぬ人もなく、世間の騒ぎにもなっている場合であ

るのに、たいした喪というわけでもないのに、自分がお見舞いにならないのも僻見をいだいているように見られることであろうからと思い、薫は二条の院へ伺った。この時分に式部卿しきぶきょうの宮と言われておいでになった親王もお薨かくれになったので、薫は父方の叔父おじの喪に薄鈍色うすにびの喪服を着けているのも、心の中では亡き愛人への志にもなる似合わしいことであると思っていた。顔は少し瘦やせていよいよ艶えんに見えた。お見舞い客が皆去ったあとの静かな夕方であつた。

宮は御病氣らしくお見えにはなつても、ただお気持ち重く沈んでしかたがないという御状態にすぎないのであつたから、うとうとしい人とは御面会にならぬが、お居間の中へ平生はお通しになる御親交のある人たちとはお逢いになるのであつたから、薫を御引見になつたが、その人の顔を御覧になると理由もなく恥ずかしくお思われになり、心弱くなつておいでになるのが隠しきれぬような涙になつて出るのをきまり悪く思召しながらも、よく心持ちをお抑おさえになり、

「たいした病氣ではありませんが、だれもが悪くなつてゆく兆候のある容体だと言つて騒ぐものですから、お上かみも中宮様ちゅうぐうも御心配あそばされるのが苦しく思われてね。それにつけてもまた人生の心細さが感ぜられてなりませんよ」

こうお言いになり、ちよつと袖そでで押すほどに拭ぬぐうてお済ませになるつもりでおありになつた涙が、どうしたかとめどもなく流れ落ちるのを、見苦しいと思召すのであるが、浮舟のために泣くとは大将に氣のつくはずもなからう、ただ人生にめめしく執着をしていると見えるだけであらうと、薫の心中を御推測のできぬ宮は思つておいでになつた。やはり恋人の死ばかりを悲しんでおいでになるのであつた、いつごろからあつた事実なのであらう、自分を滑稽こっけいな男と長い間笑つておいでになつたのであらうと思ひ、薫は悲しみもそれで忘れることができているのを宮は御覧になり、死んだ愛人に対して非常に冷淡なものである、ものの痛切に悲しい時には全然關係のないことにさえ涙が誘われ、空を鳴いて通る鳥の声にも哀傷の思ひは催されるはずではないか、自分が何の悲しみによつて病んでいるかを知つたなら、同情から平氣には見ておられぬ人なのであるが、人生の無常を深く悟り澄ました人はこんなに冷静なふうでいられるのであらうとوراやましく、御自身の及びがたさをお覚えになるのであるが、「我妹子わぎもこが来ては寄り添ふ真木まきば柱しらそも睦まじやゆかりと思へば」という歌のように、あの人を愛した男であると思ひになるとこの人にさえ愛のお持たれになる兵部卿ひやうぶけいの宮であつた。この人とある日は向かい合つていたのかとお思ひになると、形見であるというように薫の顔がお見守られに

なつた。いろいろな世間話を申ししているうちに、絶対に浮舟のことは言いださぬという態度はお取りしたくないと思い、

「私は昔からどんなこともあなた様に申し上げないで、自分だけで思っているのがとても苦しいのではございますが、今では知らぬまに私のような者も大官になつておりますし、ましてあなた様はいろいろとお忙しい身の上でお閑暇ひまなどがありますまいと存じまして、宿直とのいなどをいつでも申し上げて話を聞いていただくようなこともできません。日を過ぎておりましたが、こんなことをひとつお聞きください。昔も御承知のあの山里に若死にをしました恋人と同じ血統ちすじの人が意外な所に一人いると聞きました、昔の人の形見にときどき顔を見て慰めにしようと思つたのですが、ちょうど私といたしましては、そんなことをしては、世間からわけもなく悪く批評をされる時たずだったものですから、昔の寂しい山里へつれて行つてあつたのでございます。そして始終は訪ねて行つてやることもない間柄になつていましたし、その人も私一人にたよる心もなかつたように見えましたが、唯一の妻としては、そうした不純な心のあることは捨ておけないことですが、愛人としておくぶんには許されなくはないものですから、可憐かれんに見ておりましたが突然亡なくなつたのでございます。人生の悲哀がまたしみじみと味わわれまして、寂しい思い

をしております。もうそのことはお耳にもどちらからかはいつておりますでしょう」

と言って、この時になって泣き出した。薫^{かわる}としてもこれほど悲しむふうはお見せずまいと自戒していたのであったが、こぼれ始めてはとどめがたい涙になった。その様子に別な意味もあるふうなのを宮もお悟りになり、気の毒に思召したが、素知らぬふうをあらばした。

「御愁傷をお察しします。そのことは昨日ちょっと聞いたのでした。御弔問をしたく思いましたが、秘密にしておありになるのだとも聞いたものですから」

言葉少なにこうお言いになった。長く言うに堪えがたいお気持ちになっておいでになったのである。

「お目にかかけましたら興味をお覚えになりますだけの価値のある女性でしたが、それは私の思いますだけでなくあなたの奥様のほうの縁故のある人でしたから、もう顔など知っておいでになったかもしれません」

などと少しほのめかして薫は、

「御病気中はうるさい世の中のことなどをお耳に入れましては御安静をお妨げすることになってよろしくございません。よく御養生をなさいますし」

と申して辞し去った。非常に悲しがつておいでになった、故人を哀れな存在とは見たが、現在の帝王きやうわうと后きうがあれほど御大切にあそばされる皇子で、御容貌きようぼうといい、学才と申して今の世に並ぶ人もない方で、すぐれた夫人たちをお持ちになりながら、あの人に心をお傾けかたむけ尽くしになり、修法じきやう、読経どきやう、祭り、祓はらいとその道々で御恢復かいふくのことに騒ぎ立っているのも、ただあの人の死の悲しみによつてのことではないか、自分も今日の身になつていて、帝みかどの御女おんむすめを妻にしながら、可憐かれんなあの人を思ったことは第一の妻に劣らなかつたではないか、まして死んでしまった今の悲しみはどうしようもないほどに思われる、見苦しい、こんなふうにはほかから見られまいと忍んでいるのであるがと薫は思い乱れながら「人非木石皆有情ひとほかせきにあらずみなつじやう、不如不逢傾城色しかずけいせいこのうらあはれなるに」と口ずさんで寢室にはいった。葬儀なども簡単に済ませたことを宮も飽き足らず思召したことであらうと哀れに思われて、母の身分がよろしくなくて、異父の弟などが幾人も立ち合つてなどあとに言われることを避けて急いでしたのであらうがと不愉快に薫は思った。くわしい様子も聞かないでいることも物足らず思われ、自身で宇治へ行つてみたいと思うのであるが、喪の家へそのまま忌の明けるまで籠こもっているのも自分としてははばかりれる、行くだけ行つてすぐに帰るのも心苦しいことであると思ひもだえていた。

月が変わって、今日は宇治へ行ってみようと薫の思う日の夕方の気持ちはまた寂しく、橘たちばなの香もいろいろな連想れんそうを起こさせてなつかしい時に、杜鵑ほととぎすが二声ほど鳴いて通った。「亡き人なの宿に通はばほととぎすかけて音ねにのみなくと告げなん」などと古歌を口にしたままではまだ物足らず思われ、二条の院へ兵部卿の宮の来ておいでになる日であつたから、橘の枝を折らせて、歌をつけて差し上げた。

忍ねび音や君も泣くらんかひもなきしでのたをさに心通はば

宮は中の君の顔の浮舟によく似たのに心を慰めて、二人で庭をながめておいでになる時であつた。言外に意味のあるような歌であると宮は御覧になり、

橘にほの匂ふあたりはほととぎす心してこそ鳴くべかりけれ

なんだかかかりあいのあるようなことが言われますね。

とお返事をあそばした。宮と浮舟の姫君の関係もまたその人の死も何に基因するかも

今は皆わかってしまった中の君は、姉の女王にょおうも妹の姫君も物思いがもとで皆若死にをし

たあとに、自分だけが残っているのは感情の鈍いにぶ質であるからであらうか、それといつてもいつまでも生きていられることかと心細く思った。宮も隠してお置きになっても、いずれは知れてしまうことであるのに、隔てを置いたままであるのは苦しいことであると思召して、浮舟との関係を少しは取り繕って夫人へお話しになった。

「だれであるのかをあなたがどこまでも隠そうとしたのが恨めしかったために反発的はんぱつにそんなことにまで進んでしまったのですよ」

など、泣きも笑いもしながらお語りになる相手が、恋人の姉であることにお慰みになるところも多かった。形式が簡単でなく、ちよつとお身体からだの悪いことのあつても騒ぎがはなはだしくなり、見舞いに集まる人も多く、父の大臣、その息子たちと絶え間なしに病床に付き添っているようになると変わり、二条の院においてになることは気楽でなつかしい気分を十分お得になられることであつたのである。浮舟の死んだことはまだ夢のようにばかりお思われになり、どうして急にそうなったかという不審がお解けにならぬため、例の内記たちをお召しになり、右近を呼びにおつかわしになった。

母の常陸夫人も宇治川の音を聞くと自身も引き入れられるような悲しみが続くために

困って京へ帰って行った。念仏の役を勤める僧だけが頼もしい人のようなかすかな家と見えたが、内記がはいって行っても、人が来るとすぐに外を見まわりに来るような宿直とのいの侍もない。今はこうであるのに、あの最後の時にだけはこんな者たちが妨げて宮をお入れしなかったと時方ときかたらは思い出して悲しんだ。それほどまでに悲しみにお溺れおほにならずともよいではないかと、常は非難がましく宮をお思いしている人たちであるが、ここへ来て見ると、あの無理をして通っておいでになったあの場合、その場合が思い出され、宮にお抱かれて船に乗った方の美しかったことなどを思い出すと、だれも心強くなっておられる者はなくなつて皆泣いていた。

右近が出て来て非常に泣くのももつともなことと思われた。宮がこういう思召で迎えるために自分らをおつかわしになったということを語ると、今になって他の女房たちからも怪しいことと言われ、思われするであろうことが苦しく考えられて、

「まいりましてよくおわかりいただきますほどな細かなお話がまだできます自信がございませぬ。お四十九日が済みましたあとで、ちよつと外へまいると申すような体裁を作りまして不自然でないころになりました時、私はもう生きても居られない氣はいたしますものの、まだ生き延びておられましたなら、お召しがございませんでも伺いまし

て、ほんとうに夢のようでした悲しいお話も申し上げたいと思います」

と言い、今は動きそうにもない。内記も泣いて、

「私は何も細かい御関係のことまでは知らないのですし、事情もわかりませんが、宮様がどんなに深い愛をお持ちになりましたかということだけは存じ上げていたものですから、あなたがたとも急いで御懇意にならずとも、しまいには御主人としてお仕える方についておいでになる方と思ひまして呑氣のんきにして来たのですが、お亡かくれになつてはじめてあなたがたにもいろいろと御心配をお掛けしたことが相済まぬ、あなた様はよくお尽くしくございましたと感謝の念でいっぱいになりました」

などと言つていた。

「車も宮御自身でお指図さしずになつてお持たせになつたのですから、あき車をまた引かせては帰れません。もう一人の方でも来てくださいませんか」

と内記が言うので、右近は侍従を呼び、

「あなたが伺つてください、私の代わりに」

と言つた。

「あなたでさえもお話を申し上げる自信が持てないのに、私にどうしてそれができま

しよう。それにしましても忌中の者がお邸やしきへまいったりすることは縁起の悪いことではございませんか」

「御病氣のためにいろいろなふうに御謹慎をなさらねばならなくなっていらいですが、そんなこともかまっておいでにならない御様子なのです。また考えてみますと、あれほどお愛しになった方のためには宮様御自身が忌におこりになってもよろしいわけなのですからね、もう忌の残りが幾日もあるのではないのですから、ぜひお一人だけは来てください」

内記がこう責めるので、侍従も宮の御様子をおなつかしく思い出している心から、もう一度お目にかかりうる機会などというものはありえないことであるから、こうした時にでもと願うようになり、まいることにした。黒い服ながら引き繕つくろつて着た姿はきれいであつた。裳もは現在では主人のいない家であつたから喪の色のも作らなかつたため、淡紫うすむらさきのを持たせて車に乗つた。姫君がおいでになつたなら、宮にこうして迎えられておいでになつたであろう、自分はその時にお付きして行こうと心にきめていたのであつたが、と思ひ出すのは悲しかった。途中をずっと泣きながら侍従は二条の院へまいつた。

兵部卿の宮は侍従の來たしらせをお受けになつても身にしむようにお思われになつ

た。夫人へは恥ずかしくてお話しにはならなかったのである。宮は寢殿のほうへおいでになり、その廊のほうへ車を着けさせて侍従を下ろさせになった。

浮舟うきふねのことをくわしく聞こうとあそばすと、そのずっと前から煩悶はんもんをし続けていたこと、その前夜にひどく泣いたことなどを言い、

「怪しいほどお口数の少ない方で、内気でいらつしやいましたから、遺言らしいことは何もなさいませんでした。夢にも自殺などという強いことのおできになるとは思われませんでした」

などと侍従が話すことによって、宮はいつそうお悲しみが深くなり、命数が尽きて死んだということよりも、どんなに物思いを多くして恐ろしい川へなど身を投げたのであらうと御想像あそばすのが苦しく、その時に見つけることができたとどめえたならばと、沸きかえるような心持ちにおなりになるのであるが、今ではすべてむなしいことであつた。

「あのお手紙を始末してお焼きました時に、なぜ私たちの頭が働かなかつたのでございましょう」

と侍従は言ったりして、夜の明けるまで語っても語り足りないというふうであつた。

寺からもらった経巻へ書いて母君の返事にした歌のことなどもお話した。侍従などは何とも宮の思っておいでにならなかった女であったが、哀れに思召すために、

「自分の所にいるがよい。あちらにいる奥さんもあの人には他人でなかったのだから」と仰せられたが、

「そうしてお仕えさせていただきましては何も何も悲しいことになりました。ともかくもお忌を済ませましてから、どうとも身の振り方を考えます」

侍従はこう申し上げた。

「また来るがいい」

こんな人とすらも別れるのを悲しく宮は思召した。浮舟のために作らせておありになった櫛くしの箱一具、衣裳箱いしやう一つを宮は贈り物にあそばした。その人のためにお設けになった物は多かったのであるが、これはただ内記に託しておこしらえになっただけのものであった。

突然山莊を出て来て、こうした戴たいき物をして帰っては他の人々が何と思うであろう、少し困ったことであると侍従は思ったのであるが、御辞退のできることもなかった。宇治へ帰った侍従は右近と二人でひそかに櫛の箱と衣箱の衣裳をつれづれなままにこ

まごまと見た。はなやかな錦繡きんしゅうの服と精巧な作の箱、その中の小箱を見ながらも二人は非常に泣いた。喪にこもっている自分たちはこれをどう隠しておればいいかということにも苦心を要した。

薫も思い余って宇治へ行くことにした。途中からもう昔のことがいろいろと胸へ集まってきて、どんな因縁で八の宮の所へ自分は行き始めたのであろう、二人の女王に失恋をして、父宮から子とも認められなかった人にまで縁が生じ、この一家との結ばれによつて物思いばかりを自分はし続ける、尊い悟りをお持ちになった方へ仏の導きで近づき、未来の世界での交わりを約していながら、女王に心を引かれ始めて、信仰をよそにした報いを受けるのであろうと、こんなことも思われた。

大將は右近を前に呼んで話そうとしたが、悲しみが先に立ちはおかしい質問もできない。

「もう忌の残りの日も少なくなったのだから済んでからと思つたが、どうしても待ちきれないものがあつて来た。どんな病状でにわかにあの方は死ぬようになられたか」

と問われ、右近は弁の尼なども姫君の遺骸のなくなつていたことは氣けどつていたのであるから、隠してもしまひには薫の耳にはいることに違ひない、かえつてことを蔽おほおう

として誤解を招くことになつては姫君が氣の毒である、あの不始末を処理するためにはいろいろな嘘うそも言われたのであるが、このまじめな人に対しては、今までも逢あつた時にはこうも弁解しああも言つてと考へていたことは皆忘れてしまい、嘘は恐ろしくなり眞実の話をした。これは薫の想像にものぼらなかつたことであつたから、驚きのためにしばらくはものも言われなかつた。それを眞実とは信じがたい、普通の人が煩悶はんもんをした、悲しんだりする場合にも多くは口に言わずおおようにしていた人にどうしてそんな恐ろしいことが思い立たれるか、そのほかの事実を自分へこう取り繕つて言うのではなからうかと、いつそう心の乱れてゆくのを覚える薫であつたが、しかしあの人をお隠しになつたようでもなく宮が悲しんでおいでになつたことは著しいことであつたし、この家の様子も、死が作り事であれば自然に氣配けはいが違つてゐるはずであるのに、自分の來たのを見ると人は上から下まで集まつて來て泣き騒いでゐるではないかと考え、

「奥さんといつしよに行つてしまつた人があるか、もっと詳細にその時のことを言つてくれ。私に誠意がないからほかへ行つてしまふ氣にあの人がなつたとは思われない。何もなくてにわかになんかできるか、私は信じてゐることができない」

と言つた。予期した詰問であると右近は恐れた。

「もうおわかりになつていらつしやいましたでしょうが、宮様の姫君としてお育てられ
になつたのではございませんでしたから、心でいろいろ御苦労をなされた方でございます。
それが寂しいお住まいをなさることになりましたからはいつからともなく物思いを
なさいますことになりましたのですが、たまさかにもせよあなた様がおいでになります
時のお喜びで過去の不幸も御自身で慰めになりながらも始終お逢いあそばすことの
きますような日の出現を、口に出してはおつしやいせんでしたが始終そればかり待っ
ておいでになつたふうでございました。ようやくそのお望みのかないます御様子と私ど
もにもうかがえますことがございまして、うれしく存じて御用意にかかつておりまし
て、常陸守の奥様ひたちのかみもやつとお喜びになることができた御様子でお仕度したくのことなどをあち
らからもいろいろとお世話をしていらつしやいましたところになりました、姫君には御合
点のゆかぬような御消息がございましたそうで、それと同時に宿直とのいをいたしている侍た
ちが女房の中に品行の修まらぬ者があるとか京のお邸やしきで申されたとか言いだしまして、
ものの理解のない田舎いなかの人が無遠慮なことをよく言つてまいたりすることになります
し、あなた様から久しくおたよりもございせんことなどから、自分は薄命なものだと
小さい時から知つていたのを、人並みの幸福を得させようと心を砕いておいでになる母

君が、また今になって自分が世間の笑われものになったりしては、どんなに力を落とすだろうと、こんなお心持ちをそれとなく私どもへ始終言ってお歎きになりました。それ以外に何かあるかと考えましても、何も思い当たることはございません。鬼が隠すことがありましても片端くらいは残すでしょうのに」

と言つて右近の泣く様子は、見ていても堪えられなくなるほどのものであったから、宮との例の恋愛の事実は無根でないらしいと悟つた時から少し紛れていた薫の悲しみがよみがえり、せきあえぬふうにこの人も泣いた。

「自分の身が自分の思っているとおりにはできず、晴れがましい身の上になってしまつたのだから、逢つて慰めたいという心の起る時も、そのうち近くへ呼び寄せ、家の妻にも不安を覚えさせないようにしてから、長い将来を幸福にしたいと、自分をおさえてきたのを、誠意がなかったように思われたのも、かえつてあの人に二心があつたからではないかという気がされる。もうそんなことは言わずにおこうと思つたが、だれも聞いていないのだから事実を私に聞かせてくれ、それは兵部卿ひょうぶきょうの宮様のことだ。いつごろからのことだったのか、恋愛の技術には長じておいでになる方だから、女の心をよくお引きつけになつて、始終お逢いできぬ歎きがこうさせておしまいになり、命もなくしたの

ではないかと思う。隠さずに真実を言ってくれ。自分に少しの欺瞞ぎまんもないことを言っ
てほしい」

と薫かおるの言うのを聞いて、確かなことを皆知っておしまいになったようである、この方
もお氣の毒であるし、故人もおかわいそうであると右近は思った。

「情けないことをお聞きあそばしたものでございますね。右近がおそばにおらぬ時と
いつてはございませんでしたのに」

と言ひ、右近はしばらく黙っていたが、

「そんなこともお聞きになつていらつしやいましょうが、お姉様の二条の院の奥様の所
へ行つておいでになりました時、思いがけずそのお部屋へやへ宮様がお見えになつたことが
あるのでございますが、失礼なことも皆でいろいろ申し上げましてお立ち去りを願つた
のでございました。実はそれを恐ろしいことに思召して、あの三条の仮屋かりやのような所に
しばらくお住いになつたのでございます。それから決してお在あり処かをお知らせしますま
いと警戒をいたしておりましたのに、どういたしましたことか今年ことしの二月ごろからおた
よりがまいるようになりました。お手紙はたびたびまいつたのですが、丁寧にお頼みに
なることもございませでしたのを、もつたいないことで、そうしてお置きになります

ことはかえって悪い結果を生みますと私などがお勧めいたしましたので、一度か二度はお返事をあそばしたことがあったようでございます。それ以外のことは何もございません」

こう言った。そう言うべきことである、しいてそれ以上を聞くのもこの人がかわいそうであると薫は思い、じっとひと所をながめながら、宮をお愛したのであるが、自分をもおろそかには思えなかったらしい、迷い迷って死におもむいたのである、自分がこうした寂しい場所へさえ置かなんだならば、世の中の波にもまれることはあっても、自殺までもすることはなかったであろうと思うと、この川のあったがために悲しい結末を見ることになったのであると、宇治の流れを憎く思う薫であった。恋しい人の縁で荒い山路やまみちを往復ゆきかえりすることを何とも思わなかった薫は、この時になつて宇治という名を聞くことさえいやであるように思った。宮の夫人があゝの姫君のことを初めに戯れて人型ひとがたと名づけて言ったのも、川へ流れてゆく前兆を作ったものであったかと思うと、何にもせよ自分の軽率さから死なせたという責任も感じられた。母の現在の身分が身分であったから、葬式なども簡単にしてしまつたのであらうと不快に思ったこともくわしく聞いたことによつて、そうした想像をしたことが気の毒になり、母としてはどんなに悲し

がつていることであろう、あの身分の母の子としてはりつぱ過ぎた姫君であつたのを、陰のことは知らずに自分との縁により、姫君が煩悶をしたこともあつたとして悲しんでいることかもしれないなどと同情がされるのであつた。穢けがれというものはこの家にはいはずであるが、供の人たちへの手前もあつて家の上へは上がらず車の榻しじという台を腰掛けにして妻戸の前で今まで薫は右近と語つていたのである。これを長く続けているのも見苦しく思われて茂つた木の下こけの苔の上を座にしてしばらく休んでいた。もう山莊に来てみることも心を悲しくするばかりであろうから、今後来ることはないであろうと思ひ、その辺を見まわして、

われもまたうきふるさとをあれはてばたれ宿り木の蔭かげをしのばん

こんな歌を口ずさんだ。

以前の阿闍梨あじやりも今は律師になつていた。その人を呼び寄せて浮舟うきふねの法事のことで大將は指図さしずしていた。念仏の僧の数を増させることなども命じたのであつた。自殺者の罪の重いことを考えてその滅罪の方法も大將はとりたい、七日七日に経巻と仏像の供養をす

ることなども言い置いて、暗くなつたのに歸つて行く時、あの人がいたならば今夜は帰ることではないのであると悲しかった。尼君の所へ人をやつたが、

「私と申すものが凶事 of するしのように思われまして、心をめいらせておりますこのごろは、以前よりもいっそうぼけてしまひまして、うつ伏しに寝^{やす}んだままでおります」

と言ひ、話しに出てこなかつたので、しいて逢おうとは言わなかつた。

途^{みち}すがら薫は浮舟を早く京へ迎えなかつたことの後悔ばかりを覚えて、水の音の聞こえてくる間は心が騒いでしたかたがなかつた。遺骸だけでも捜してやることをしなかつたと残念でないのであつた。どんなふうになつてどこの海の底の貝殻^{かいがら}に混じつてしまつたかと思うと遺瀨^{やるせ}なく悲しいのであつた。

常陸夫人は京に産をする娘のあるために潔斎潔斎ときびしく言われる家へはいれな^{ひま}いで、他のところにいて悲しみの休む間もないのである、その娘もまたどうなることかと不安だつたがそれは安産した。穢^{けが}れがあつてはこれも見に行くことができないのである、そのほかの子供たちのことも皆忘れたようになり、茫然^{ぼうぜん}としている時に右大将からそつと使いが来て手紙をもらった。ぼけている心にもそれはうれしかったが、また悲しくもなつた。

思いがけぬ不幸にあい、まずあなたに悲しみを訴えたいと思ったのですが、心が落ちて、また涙に目も暗くなる気がして実行はできませんでした。ましてあなたはどんなに悲しんでおいでになることだろう。涙に沈んでおいでになることだろうと思いますと、手紙をあげてもお読みにはなれまいと遠慮も申しているうちに日がずんずんとたちました。人生の常なさがことごとに形となつてわれらをおびやかします。この悲しみにも堪える力の許されて、私が生きていましたなら、故人の縁のあつた者として何かのことは御相談もしてください。

などともやかな心で書かれたものだった。使いにはあの大蔵大輔たゆうが来たのである。

「すべてを気長に考えていたものですから、かなり月日はたつていても、必ずしも私を誠意のある婿とは思つてくださらなかったでしょう。しかし今は何につけてもあなたの御一家のことは念頭に置いて忘れますまい。またそのように内々信じてくださつて、お力になるものと思つていてください。小さい息子むすこさんたちもあるそうですが、仕官をおさせになる場合には必ず後援をするつもりで私はいます」

と、言葉でも伝えさせた。ひどく忌む性質の穢れでもないからと言って、夫人はしいて大輔を座敷へ招じた。そして返事を泣く泣く書いていた。

悲しい思いをいたしますだけでは死なれませぬ命を歎いております私へ、もったいないおいたわりの言葉などのいただけますとは夢想もいたしませんでした。故人がおりました間、心細い様子は見ておりながら、それは私自身の無力からであると存じまして、ただおそれ多い行く末かけてのあたにかいお言葉一つを頼みにいたしておりますが、死なせましてあとではあの地との因縁が悲しくばかり思われてなりません。いろいろと将来のことであれしい仰せを賜りましたことで、命の延びることにもなりまして、今しばらく生きてまいれますことになりましたら、その息子たちのことであなた様のお力におすがり申し上げる日もあろうと思ひますにつけても、あの人の亡くなつてありませぬ現在の悲しみに目も涙で暗くなるばかりでございます、感謝の思いも書き尽くすことができませんのをお許しください。

などと書いた。使いへの贈り物に普通の品を出すべき場合ではないし、またそれだけでは不満足な感じをあとでみずから覚えさせられることであらうからと思ひ、貴重品として将来は故人の姫君に与えようと考えていた高級な斑犀はんざいの石帯せきたいとすぐれた太刀たちなどを袋に入れ、車へ使いが乗る時いっしょに積ませた。

「これは故人の志でございます」

と言わせて贈ったのであった。

帰った使いは贈られた品を大将に見せると、

「よけいなことをするものだね」

と薫は言った。使いの伝えた言葉は、

「奥さんが自身でお逢いになりました、非常に悲しい御様子で、泣く泣くいろいろの話をなさいました。若い息子たちのことまでも御親切におっしゃっていただきましたことはもったいないことで、うれしく存じますが、しかしながらまたあまりに恐縮な当方の身分でございますから、人には何のためにとは絶対に知らせぬようにいたしました、できのよろしい子供たちだけを皆お邸やしきへ差し上げることにしようということでした」

その言葉どおりに奇妙な親戚関係しんせきと人には見られることであろうが、宮中へそうした地方官が娘を差し上げないこともないのであるし、また素質がよくて帝王がそれをお愛しになることになってもお識そしりする者はないはずである、人臣である人たちはまして世間から無視されている階級の家の娘を妻にしている類も多いのである、常陸守ひたちのかみの娘であつたと人が言つても自分の恋愛の径路が悪いものであれば指弾もされようが、そんなことではないのであるからはばかりする必要もない、一人の大事な娘を不幸に死なせた母親

を、その子ののこした縁故から一家に名誉の及ぶことで慰めるほどの好意はぜひとも自分の見せてやらねばならないのが道であると薫は思った。

母の隠れ家へは常陸守が来て立ちながら話すのであったが、娘に出産のあったおりもおりにだれかの触穢しよくえを言い立てて引きこもっていることなどで腹だたいふうに言っていた。去年の夏以来姫君がどこにいるかをありのままには夫人の言つてなかった常陸守であったから、寂しい生活をしていることであろうと思ひもし、言ひもしていたのを大將に京へ迎え入れられたあとで、名誉な結婚をしたと知らせようと夫人が思つていたうちに浮舟は死んでしまったのであったから、隠しておくのもむだなことであると夫人は思い、薫と結婚をして宇治に住まわせられていたこと、そして病んで死んだ話を泣く泣く語るのであった。薫からもらった手紙も出して見せると、貴人を崇拝する田舎いなか風な性質になつてゐる守は驚きもし臆おくしもしながら繰り返し繰り返し薫の手紙を読んでゐる。

「幸福で名誉な地位を得ていて死んだ方だ。自分も大將の家人けにんの数にはしていただいている者で、お邸へはまいることがあつても近くお使いになることもなかった。とても氣けだ高い殿様なのだ。息子たちのことを言つてくだすつたのは非常にあれらのために頼もし

いことだ」

こう言つて喜ぶのを見ても、まして姫君が大将夫人として生きていたならばと思わないではいられない夫人は、臥ふしまろんで泣いていた。守もこの時になつてはじめて泣いた。しかしながら浮舟が生きているとすれば、かえつて異父弟の世話を引き受けようなどと薫はしなかつたことであらうと思われる。自身の過失から常陸夫人の愛女を死なせたのがかわいそうで、せめて慰めを与えることだけはいたいと思う心から、他の譏そりがあらうとも深く氣にとめまいという氣になつてゐるのである。

薫は四十九日の法事の用意をさせながらも實際はどうあの人はなつたのであらう、まだ一点の疑いは残されてゐると思うのであるが、仏への供養をすることは人の生死にかかわらず罪になることではないからと思ひ、ひそかに宇治の律師の寺で行なわせることにしてゐるのであつた。六十人の僧に出す布施の用意もいかめしく薫はさせた。母夫人も法会には来ていて、式をはなやかにする寄進などをした。兵部卿の宮からは右近の手もとへ銀の壺つぼへ黄金の貨幣を詰めたのをお送りになつた。人目に立つほどの派手はでなことはあそばせなかつたのである。ただ右近が志として供物にしたのを、事情を知らぬ人たちはどうしてそんなことをしたかと思ひ議がつた。薫のほうからは家司けいしの中でも親しく

思われる人たちを幾人もよこしてあつた。在世中はだれもその存在を知らなんだ夫人の法事を、薫がこんなにまで丁寧^{ていねい}に営むことによつて、どんな婦人であつたのかと驚いて思つてみる人たちも多かつたが、常陸守が来ていて、はばかりもなく法会^{ほうえ}の主人顔に事を扱っているのをいぶかしくだれも見た。少将の子の生まれたあとの祝いを、どんなに派手に行なおうかと腐心して、家の中にない物は少なく、支那^{しな}、朝鮮の珍奇な織り物などをどうしてどう使おうと驕^{おご}つた考えを持つていた守ではあつたが、それは趣味の洗練されない人のことであるから、美しい結果は上がらなかつた。それに比べてこの法会の場内の莊嚴をきわめたものになつていて、生きているならば、自分らと同等の階級に置かれる運命の人でなかつたのであつたと守は悟つた。兵部卿の宮の夫人も誦經^{ずきやう}の寄付をし、七僧への供膳^{きやうぜん}の物を贈つた。

今になつて隠れた妻のあつたことを帝^{みかど}もお聞きになり、そうした人を深く愛してゐたのであろうが、女二^{にょに}の宮^{みや}への遠慮から宇治などへ隠しておいたのであろう、そして死なせたのは氣の毒であると思召した。

浮舟の死のために若い二人の貴人の心の中はいつまでも悲しくて、正しくない情炎の盛んに立ちのぼつていたところにそのことがあつたため、ことに宮のお歎きは非常なもの

であつたが、元來が多情な御性質であつたから、慰めになるかと恋の遊戲もお試みになるようなこともようやくあるようになった。薫は故人ののこした身内の者の世話などを熱心にしてやりながらも、恋しさを忘れなく思つていた。

中宮ちゅうぐうもまだそのまま叔父おじの宮の喪のために六条院においでになるのであつたが、二の宮はそのあいた式部卿にお移りになった。お身柄が一段重々しくおなりになったために、始終母宮の所へおいでになることもできぬことになったが、兵部卿ひょうぶきやうの宮は寂しく悲しいままによくおいでになつては姉君いっげんの一品の宮の御殿を慰め所にあそばした。すぐれた美貌びぼうであらせられる姫宮をよく御覧になれぬことを物足らぬことにしておいでになるのであつた。右大將が多数の女房の中で深い交際をしている小宰相こさいしやうという人は容貌ようぼうなどもきれいであつた。価値の高い女として中宮も愛しておいでになった。琴の爪音つまおとも琵琶びわの撥音はちおとも人よりはすぐれていて、手紙を書いてもまた人と話しをしても洗練されたところの見える人であつた。兵部卿の宮も長くこの人に恋を持つておいでになるのであつて、例の上手じやうずに説き伏せようとお試みになるのであるが、誘惑をされてだれも陥るような御関係を作りたくないと強い態度を変えないのを、薫かおるはおもしろい人であると思つて好意が持たれるのである。このごろの薫が物思いにとらわれているのも知つていて、

黙っていることができぬ氣もして手紙を書いて送った。

哀れ知る心は人におくれねど数ならぬ身に消えつつぞ経る^ふ

私が代わって死んでおあげすればよかったように思われます。

と感^あじのよい色の紙に書かれてあつた。身にしむような夕方時のしめつばい氣持^{きもち}をよく察^さして訪^{たず}ねの文^{ふみ}を送った心持^{こころもち}を薫^{かほ}は感謝せずにはおられなかつた。

つれなしとこら世を見るうき身だに人の知るまで歎^{なげ}きやはする

これを返歌にした。

答礼のつもりで、

「寂しい時の御慰問のお手紙はことにありがたく思われました」

と言いに小宰相の家を薫^{たず}は訪ねて行つた。貴人らしい重々しさが十分に備わり、こんなふう^なに中宮の女房の自宅へなど、今までは一度も行つたことのない薫^{かほ}が訪ねて来た所

としては貧弱な邸やしきであつた。局つばななどと言われる狭い短い板の間の戸口に寄つて薫かの坐ざしているのを片腹痛いことに思う小宰相であつたが、さすがにあまりに卑下もせず感じのよいほどに話し相手をした。失つた人よりもこの人のほうに才識のひらめきがあるではないか、なぜ女房などに出たのであらう、自分の妻の一人として持つていてもよかつた人であつたのにと薫は思つていた。しかしながら友情以上に進んでいこうとするふうを少しも薫は見せていなかった。

蓮はすの花の盛りのころに中宮は法華ほけ經の八講を行なわせられた。六条院のため、紫夫人のため、などと、故人になられた尊親のために経卷や仏像の供養をあそばされ、いかめしく尊い法会ほうえであつた。第五卷の講ぜられる日などは御陪觀する価値の十分にあるものであつたから、あちらこちらの女の手蔓てづるを頼んで参入して拝見する人も多かつた。五日めの朝の講座が終わつて仏前の飾りが取り払われ、室内の装飾を改めるために、北側の座敷などへも皆人がはいつて、旧態にかえそうとする騒ぎのために、西の廊の座敷のほうへ一品の姫宮は行つておいでになつた。日々の多くの講義に聞き疲れて女房たちも皆部屋へやへ上がつていて、お居間に侍している者の少ない夕方に、薫の大將は衣服を改めて、今日退出する僧の一人に必ず言つておく用で釣殿つりどののほうへ行つてみたが、もう僧た

ちは退散したあとで、だれもいなかったから、池の見えるほうへ行つてしばらく休息したあとで、人影も少なくなっているのを見て、この人の女の友人である小宰相などのために、隔てを仮に几帳きちようなどとして休息所のできているのはこちらであろうか、人の衣擦きぬずれの音がすると思い、内廊下の襖子からかみの細くあいた所から、静かに中をのぞいて見ると、平生女房級の人の部屋へやになつてゐる時などとは違い、晴れ晴れしく室内の装飾ができていて、幾つもの立ち違いに置かれた几帳はかえつて、その間から向こうが見通されてあらわなのであつた。氷を何かの蓋ふたの上に置いて、それを割ろうとする人が大騒ぎしている。大人の女房が三人ほど、それと童女がいた。大人は唐衣からぎぬ、童女は衫かざみも上に着ずくつろいだ姿になつてゐたから、宮などの御座所になつてゐるものとも見えないのに、白い羅うすものを着て、手の上に氷の小さい一切れを置き、騒いでゐる人たちを少し微笑をしながらながめておいでになる方のお顔が、言葉では言い現わせぬほどにお美しかった。非常に暑い日であつたから、多いお髪くしを苦しく思召すのか肩からこちら側へ少し寄せて斜めになびかせておいでになる美しさはたとえるものもないお姿であつた。多くの美人を今まで見てきたが、それらに比べられようとは思われない高貴な美であつた。御前にいる人は皆土のような顔をしたものばかりであるとも思われるのであつたが、気を静めて見る

と、黄の涼絹すずしの単衣ひとえに淡紫うすむらさきの裳もをつけて扇を使っている人などは少し氣品があり、女らしく思われたが、そうした人にとって氷は取り扱いにくそうに見えた。

「そのままにして、御覽だけなさいましよ」

と朋輩ほうばいに言つて笑つた声に愛嬌あいきょうがあつた。声を聞いた時に薫は、はじめてその人が友人の小宰相であることを知つた。とどめた人のあつたにもかかわらず氷を割つてしまつた人々は、手ごとに一つずつの塊かたまりを持ち、頭の髪の上に載せたり、胸に当てたり見苦しいことをする人もあるらしかった。小宰相は自身の分を紙に包み、宮へもそのようにして差し上げると、美しいお手をお出しになつて、その紙で掌てをおぬぐいになつた。

「もう私は持たない、雫しずくがめんどうだから」

と、お言いになる声をほのかに聞くことのできたのが薫のかぎりもない喜びになつた。まだごくお小さい時に、自分も無心にお見上げて、美しい幼女でありになると思った。それ以後は絶対にこの宮を拝見する機会を持たなかつたのであるが、なんという神か仏かがこんなところを自分の目に見せてくれたのであらうと思ひ、また過去の経験にあるように、こうした隙見すきみがもとで長い物思ひを作らせられたと同じく、自分を苦しくさせるための神仏の計らいであらうかとも思われて、落ち着かぬ心で見つめてい

た。この対の北側の座敷に涼んでいた下級の女房の一人が、この襖からかみ子は急な用を思い
ついてあけたままで出て来たのを、この時分に思い出して、人に気づかれては叱しかられる
ことであろうとあわてて帰って来た。襖子に寄り添った直衣姿のうしの男を見て、だれであろ
うと胸を騒がせながら、自分の姿のあらわに見られることなどは忘れて、廊下をまっす
ぐに急いで来るのであった。自分はすぐにここから離れて行つてだれであるとも知られ
まい、好色男らしく思われることであるからと思ひ、すばやく薫は隠れてしまった。そ
の女房はたいへんなことになった、自分はお几帳きちようなども外から見えるほどの隙すきをあけて
来たではないか、左大臣家の公達きんだちなのであらう、他家の人がこんな所へまで来るはずは
ないのである、これが問題になればだれが襖子をあけたかと必ず言われるであらう、あ
の人の着ていたのは単衣ひとえも袴はかまも涼絹すずしであつたから、音がたたないで内側の人は早く気づ
かなかつたのであらうと苦しんでいた。

薫は漸く僧に近い心になりかかつた時に、宇治の宮の姫君たちによつて煩惱ぼんのうを作り始
め、またこれからは一品いっぽんの宮みやのために物思ひを作る人になる自分なのであらう、その二
十ちのころに出家をしていたなら、今ごろは深い山の生活にも馴なれてしまい、こうした乱
れ心をいだくことはなかつたであらうと思ひ続けられるのも苦しかった。なぜあの方を

長い間見たいと願った自分なのであろう、何のかがあろう、苦しいもだえを得るだけであつたのにと思つた。

翌朝起きた薫は夫人の女二の宮の美しいお姿をながめて、必ずしもこれ以上の御美貌^{びぼう}であつたのではあるまいと心を満ち足りたようにしいてしながら、また、少しも似ておいでにならない、超人間的にまであの方は気品よくはなやかで、言いようもない美しさであつた。あるいは思いなしかもしれぬ、その場合がことさらに人の美を輝かせるものだつたかもしれぬと薫は思い、

「非常に暑い。もっと薄いお召し物を宮様にお着せ申せ。女は平生と違つた服装をしてゐることなどのあるのが美しい感じを与えるものだからね。あちらへ行つて大^{だい}貳^にに、薄物の単衣^{ひとえ}を縫つて来るように命じるがいい」

と言いだした。侍している女房たちは宮のお美しさにより多く異彩の添うのを楽しんでの言葉ととつて喜んでいた。いつものように一人で念誦^{ねんず}をする室^{へや}のほうへ薫は行つていて、昼ごろに来てみると、命じておいた夫人の宮のお服が縫い上がつて几帳^{きちよう}にかけられてあつた。

「どうしてこれをお着にならぬのですか、人がたくさん見ている時に肌^{はだ}の透く物を着る

のは他をないがしろにすることにもあたりますが、今ならいいでしょう」

と薫は言つて、手ずからお着せしていた。宮のお袴はかまも昨日の方と同じ紅であつた。お髪ぐしの多さ、その裾すそのすばらしさなどは劣つてもお見えにならぬのであるが、美にも幾つの級があるものか女二の宮が昨日の方に似ておいでになつたとは思われなかつた。氷を取り寄せて女房たちに薫は割らせ、その一塊ひとかたまりを取つて宮にお持たせしたりしながら心では自身の稚態がおかしかつた。絵に描かいて恋人の代わりにながめる人もないのではない、ましてこれは代わりとして見るのにかき離れた人ではないはずであると思うのであるが、昨日こんなにしてあの中に自分もいっしょに混じつていて、満足のできるほどあの方をながめることができたのであつたなと思うと、心ともなく歎息の聲が発せられた。

「一品の宮さんへお手紙をおあげになることがありますか」

「御所にいましたころ、お上かみがそうおっしゃつたものですから、差し上げたこともありましたが、ずいぶん長く御交渉はなくなつています」

「人臣の妻におなりになつたからといって、あちらからお手紙をくださらなくなつたのでしょうか、悲観させられますね。そのうち私から中宮へあなたが恨んでおいでになる

と申し上げよう」

と薫は言う。

「そんなこと、お恨みなど私はしているのでございますか。いやでございます」

「身分が悪くなったからといって軽蔑けいべつをなさるらしいから、こちらからは御遠慮して消息を差し上げないとそんなふうに言いましょう」

こんなことを言つてその日は暮らし、翌日になつて大將は中宮の御殿へまいつた。例の兵部卿ひょうぶきやうの宮も来ておいでになつた。丁子ちやうじの香と色の染しんだ羅うすものの上に、濃い直衣のうしを着ておいでになる感じは美しかった。一品いっぽんの宮みやのお姿にも劣らず、白く清らかな皮膚の色で、以前より少しお痩やせになつたのがなおさらお美しく見せた。女宮によく似ておいでになるということから、またおさえている恋しさがわき上がるのを、あるまじいことであると思ひ、静めようとするのもあの日の前には知らぬ苦しみであつた。兵部卿の宮は絵をたくさんに持つて来ておいでになつたが、そのうちの幾つかを女房に姫宮のほうへ持たせておあげになり、御自身もあちらへおいでになつた。

薫は後の宮のお近くへ寄つて行き、御八講の尊かつたことを言い、六条院のことも少しお話し申し上げながら、残つた絵を拝見している時に、

「私の所に来ておいでになります宮さんが、宮廷から離れて屈託した気持ちになつておられますのをお気の毒だと見ております。一品の宮様のお消息などをただけませんか」とを人妻に降^{くだ}つたことで愛をお捨てになつたように思つて樂しまないふうなのでございますが、こういたしたもののなどをときどき見せてあげてくださつてはいかがでしょう。私がその使いはいたします。私どものほうのも持つてまいります」

と中宮へ申し上げると、

「まあそんなことで御交際をおやめになるものですか。同じ御所の中におられたころは、近いものですからときどき手紙が通つたのでしようが、遠く離れ離れにおなりになつた時からお手紙が途絶え始めて、そのままになつたことなのでしょう。そのうち私からお勧めしてお書きになるようにしますよ。そちらからだつてお手紙をお送りになればいいのにね」

と、宮は仰せられた。

「そちらからは出過ぎたように思われておできにならないのでしょう。初めから御交渉のなかつた方にいたしましても、私と宮様がたとの縁の続きに愛しておあげくださることになるのがうれしい成り行きなのですが、まして以前から御交際のあつた間柄でおあ

りになるのですから、私の所へ来られましたあとでお捨てになるのは、あの宮さんにとっておかしいそうなことです」

などと申しているのを、恋が言わせることと中宮はお悟りにならなかった。

薫は中宮のお居間を辞して、先夜の好意のある女友人にも逢おう、あの思い出の廊の座敷を心の慰めに見て行こうと思ひ、縁側伝いに西に向いて歩いて行つた。御簾みすの中にいる女房たちはそれだけのことにすら心づかいのされる薫の大将であつた。渡殿わたどののほうには左大臣の息子らがいて、女房たちと話し合っている様子であつたから、この人は妻戸のところになつて、

「始終この院へはまいっている私ですが、こちらの宮様の御殿へ伺うことができないでいますと、自然老人めいた気持ちになるようになったのですが、これからはそうしてまいと決心してまいつたのですよ。馴なれない人間の恰好かつこうは滑稽こっけいなものに若い人たちからは見られることでしょう」

甥おいの公子たちのほうを見ながらこう言つていた。

「ただ今からお習いになりましたなら新鮮なお若さが拝見されることでしょう」

などと戯れて言う女房らからも怪しいまでの高雅な感じの受け取られるのであつた。

何をおもな話題にするというのでもなく、世間話を平生よりもしみりと話し込んで薫かおるはいた。

姫宮は中宮ちゅうぐうの御殿のほうへおいでになった。後の宮が、

「大將があちらへ行きましたか」

とお尋ねになると、一品の宮のお供をしてこちらへ来た大納言の君が、

「小宰相に話があると言つていらつしゃいました」

と申した。

「まじめな人であつて、さすがに女の友だちにも心の惹ひかれるところがあつてむだ話もして行きたいのだろうがね。才能のない人が相手をしては恥ずかしい。女の価値がすぐ見破られるからね。小宰相ならまず安心だけれど」

こんなことをお言いになる宮は、御弟なのであるが、薫に周囲を観察されることを恥ずかしく思召し、女房らも飽き足らず思われるところを見せぬようにしてほしいと思召すのである。

「あの人をだれよりも御ひいきになさいまして、部屋のほうへも寄つてお行きになることがよくあるようでございます。しみりとお話をしておいでになることもございまし

て夜がふけてお帰りになることはありましても恋愛関係と申すようなことはなさそうに思われます。あの人兵部卿の宮様の御性情には反感を持っておりまして、お返辞すらよくいたさないようでございますのはもったいないことでございます」

と言ひ、大納言の君が笑うと、中宮もお笑いになつて、

「あの宮の多情な本質が直感できるのだからいいね。どうしてあの方の悪癖を直させたらいいだろう、恥ずかしいと私は思う。だれも皆そう思っているだろうね」

こうお語りになつた。

「妙な話を私は聞いたのでございます。あの大将さんのお亡なぐしになりました人は兵部卿の宮様の二条の院の奥様のお妹さんだつたそうでございます。前常陸守の妻はその方の叔母おばであるとも、母であるとも申しますのはどういふ理由わけであるのかよく存じません。その大将の愛人の所へそつと兵部卿の宮様も通つてお行きになつたといふことでございまして、大將さんがそれをお聞きになりましたのか、にわかに宇治から京へ迎えようとなすつて、監視の人などをきびしくお付けになりましたところに、宮様はまたおいでになつたのでございますが、家の中へおはいりになることができませんで、危険なことではございますが、お馬のまま外に立つておいでになり、それなり歸つておしまいになつ

たということでございます、女も宮様をお慕いしていたのでしょうか、にわかに行くえがわからなくなりましたのを、川へ身を投げたのであらうと、乳母うばというような者が泣き騒いで言っていたそうでございます」

大納言の君はこんな話を申し上げた。中宮がお驚きになったことは言うまでもない。「だれがまあそんな噂話うわさばなしをしていたの、ほんとうに面白いそうな話ではないか。そんな出来事はすぐ噂になるものなのに、そうでもなし、また大将もそんなふうには話さずに、人生の悲哀を強調して話すだけで、また宇治の宮さんの一族が皆短命で死ぬのは悲しいことだとは言っていないけれども」

「ほんとうでございますか、どうでございますか、しもぎまの者は確かでないこともほんとうらしく話にいたすものですが、その宇治の山荘におりました下童しもわらわがついこのごろ宰相の実家のほうへ来まして、確かなことのように申していたそうでございます。そうした死に方をなさいましたことを世間へ知らすまい、自殺などという思いきったことをした人だと言わすまいと皆が隠すことに骨を折ったそうでございます。それで大将さんもおくわしいお話をあそばさなかったのではないでしうか」

「その話をまたほかへ行つてするなと宰相からお言わせよ。そうした問題で宮は自身を

だいなしにしておしまいになることにもなり、世間からも軽蔑けいべつされることにおなりになるだろう」

こうお言いになって、中宮は非常に御心配をあそばす御様子であった。

それからまもなく一品の宮から女二の宮へお手紙が来た。御手跡のおみごとであるのを見ることのできたことが薫にはうれしくて、期待にはずれないごりつぱさである、もつと早くこれが拝見できる方法を講ずべきであったなどと思った。多くの美しい絵などを中宮からお送りになった。お礼として薫からもそれにまさった絵を集めて差し上げることにした。小説の芹川せりかわの大將が女一の宮を恋して秋の日の夕方に思い侘わびて家から出て行くところを描かいた絵はよく自身の心持ちが写されているように思われる薫であった。その人のように成功すべき恋でないのが残念であった。

萩をぎの葉に露吹き結ぶ秋風も夕べぞわきて身にはしみにける

と書き添えたい気がするのであるが、そうしたことは氣けぶりにも知れたならばどんなことの言われるかしれぬ世の中であるからと、思うことすらも洩もらしがたい恋に心を悩

ませ、はては宇治の大姫君さえ生きていてくれたならば、その人を妻とすることができていたのであれば、どんな人を見ても心の動揺することなどはなかったはずである。現代の帝王の御女を賜おんむすめわるといっても、自分はお受けをしなかったはずである、また自分がそれほど愛している妻があるとかわかっておいでになって姫宮をお嫁とがせになることもなからう、何といっても自分の心の混乱し始めたのは宇治の橋姫のせいであると、こんなことを思っおもってゆくうちに薫の心はまた二条の院の女王の上に走って、恋しくも恨めしくもなり、取り返されぬ昔を愚かしいままに残念に思った。もうどうすることもできないことなのであると、それを心に片づけたあとでは、また自殺をしてしまった浮舟うきふねが、思想的に幼稚でよこしまな情熱に逢あつてたちまち動かされていった軽率さを認めながらも、さすがに煩悶を多くしていたこと、そのころに自分の気持ちの変わったことで、自責の念から歎きに沈んでいた様子を宇治で聞いて知ったことも思い出され、妻というような厳肅な意味の相手ではなく、心安く可憐かれんな愛人としておきたいと思うのにはふさわしくかわいい女性であったと考えられ、もう宮に不快の念を持つまい、女をも恨むまい、ただ自分の非常識から若い愛人をあおした場所へ置き放しにしていたのがあやまちの原因だったのであると、こんなふうに物思いの末にはあきらめをつけることにもなっ

た。

静かな落ち着いた薫さえこんなふう恋愛については身体からだにもさわるほどな苦しみも時には味わうのであるから、まして浮舟をお失いになった兵部卿の宮は心を慰めかねておいでになって、その人の形見の人として悲しみを語り合う人さえもありません、対の夫人だけは哀れな人であったと言ってくれはするものの、姉妹きょうだいとして交わっていた期間はずかなことであつたから、深い悲しみは覚えているはずもない、また宮としては思召すままに恋しい悲しいと言ひになることも、夫人に向かつてのことであるからお心のとがめられることであるために、あの山莊の侍従をお呼び寄せになつた。女房たちは皆ちりぢりに去つてしまつたあとに、乳母めのとと右近、侍従だけは故人が最も親しんだ人たちであつたから、喪の家から離れず、一方は親子であつて、侍従は関係のない間柄ではあるが、いっしょに山莊へ残つて暮らしたのであつたが、荒々しい川音を聞くのも、そのうち京の邸やしきへ姫君の迎えられて行く日を樂しみにして辛抱しんぱうされたものの、情けなく、気味悪くばかり思われて、京のちよつとした知り合いの家へこのごろは侍従だけが移つて来ていた。宮がお捜させになつてこのまま二条の院の女房になるようにと仰せになるのであつたが、夫人はともかくも、他の女房たちから浮舟の姫君と宮とのあるま

じい情交の起こつていたことで何かと非難がましいことを言われるであろうことが思われお受けをしなかった。中宮の女房になつてお仕えしたいとそれとなく内記に言つてもらうと、

「それはよい。そして自分が陰で勤めよくなるようにしてやろう」

と言う宮のお返辞であつた。侍従は姫君を失つた心細さも慰むかと思ひ、手蔓てづるを求めて目的の宮仕えをする身になつた。見た目のきれいな下級女房であるとも人も認めて、侍従は悪くも言われていなかった。大將もよくまいるのを陰かげで見ると昔が思われる物哀れな心になつた。貴族の姫君たちだけのお仕えしている場所だと聞いていて、そうした上の女房たちの顔をこのごろ皆見知るようになってから考えても、浮舟の姫君ほどの美貌の人はないようであつた。

今年の春お薨かくれになつた式部卿しきぶきょうの宮の姫君を、継母まははの夫人が愛しないで、自身の兄の右馬頭うまのかみで平凡な男が恋をしているのに、姫君をかわいそうとも思わずに与えようとしていることを中宮へある人から申し上げると、

「気の毒な、宮様がたいへん大事になすつた女王にょおうさんを、そんな廃すたり者にしてしまおうとするなどとは」

と憐^{あわれ}んで仰せられた。

「たよりない心細い思いをしているあなたにそうしたあたたかい同情を寄せてくださるのだから、中宮へお仕えしたら」

と、兄の侍従も宮仕えを勧めた女王を、このごろ中宮は手もとへ侍女にお迎えになった。女一^{にょいち}の宮のお相手として置くのによい貴女^{きじょ}と思召して、特別な御待遇を賜わって侍しているのであったが、お仕えする身であるかぎり、やはり宮の君などと言われ、唐衣^{からぎぬ}までは着ぬが裳^もだけはつけて勤めているのは哀れなことであった。兵部卿^{ひょうぶきやう}の宮は、この人だけは恋しい故人に似た顔をしているであろう。式部卿の宮と八の宮は御兄弟なのであるからなどと、例の多情なお心は、昔の人の恋しいために、新たな好奇心もお起こしになることがやまず、いつとなく宮の君を恋の対象としてお考えになるようになった。

人生は味気ないとこの女王についても薫^{かほ}は思うのであった。まだ昨今というほどのことではないか、東宮の後宮へお入れになろうと父宮がお願いになり、自分へも娶^{めと}らせよう^ととされた姫君である、栄えた人のたちまち衰えてゆく^とのを見ては、水へはいってしまった人はそれを見ぬだけ賢明であつたかもしれぬなどと薫は思い、他の女房に対するよりもこの女王に好意を寄せていた。

六条院に中宮ちゆうぐうのおいになることは、宮中のお住居すまいよりも広く住みよくだれも思い、

時々まいるだけで始終は侍していぬ人までも皆上がって来ていて、はるばると多く続いた対、廊、渡殿の座敷は女房で満ちていた。左大臣は父君の院の御在世当時にも劣らず中宮のためにあらゆる物をととのえて奉仕していた。末広がりになった一族であったから、かえって昔よりも六条院のはなやかさはまさってさえ見えた。兵部卿の宮が今までのようなふうでおありになれば、この集まった女性の中のある人々とこの幾月かのうちにはどんな問題を起こしておいになるかもしれないのであるが、すっかりと冷静になりになり、人から見れば少し性質がお変わりになったかと思われたのであるが、近ごろになってまた宮の君にお心を惹ひかれ、御本性どおりにつきまといておいでになった。

秋冷の日になって中宮は宮中へ帰ろうとあそばされるのであったが、秋の盛りの紅葉もみじの季にここで逢えないのは残り惜しいことであると若い女房たちは言い、だれも皆実家にいず、このごろは六条院にまいていた。水を愛し、月の景色けしきを喜んで音楽の催しなども常にあった。兵部卿の宮は常よりもはなやかな六条院を愛して、この空気の中心のようになつておいでになるのである。朝夕にお顔を見ていながらも、いつも今咲きそめた花に逢あう気のされる兵部卿の宮であった。薫はそれほど入り立っていないのであるた

めに、若い中宮の女房たちは、この人が来れば緊張してしまうのであった。ちょうどこの二人の若い貴人の同時に中宮のお居間に来合わせている時であったが、宇治にいた侍従は物蔭からのぞいて、どちらにもせよこのりっぱな方々の一人に愛されて生きておいでになればよかった。恵まれておいでになった幸運をわれから捨てておしまいになった姫君であると思い、他の人には宇治の山荘のこと、薫の愛人であった姫君のことなどは知ったふうには言っていないことであつたから心一つに残念がつていた。兵部卿の宮が御所のお話などを細かく母宮へしかかつておいでにもなつたため、薫がお居間を出て行くうとするのを見、自分を見つけさすまい、一年の忌の来るのも済まさずに宇治を去つたのは故人へ情のないことであるとは思われないと思い、侍従はすぐに隠れてしまった。

東の廊の座敷のあいた戸口に女房たちがおおぜいいてひそひそと話などをしている所へ薫は行き、

「私をあなたがたは親しい者として見てくださるでしょうか、女にだって私ほど安心してつきあえるものではありませんよ。それでも男ですから、あなたがたのまだ聞いている新しい話も時にはお聞かせすることができのですよ。おいしい私の存在価値がわ

かつてただけるだろうという自信がそれでもできましたからうれしく思っています」

こんな戯れを言いかけた。だれも晴れがましく思い、返辞をしにくく思っている中に、弁の君という少し年輩の女が、

「お親しみくださる縁故のない者がかえって私のように恥じて引っ込んでいないことになります。ものは皆合理的にばかりなつてゆくものではございませんね。だれの家のだれの子でございますからと申しておつきあいを願うわけのものでもありませんけれど、羞恥心しゅうちを取り忘れたようにお相手に出ました者はそれだけの御挨拶あいさつをいたしておきませんではと存じますから」

と言った。

「羞恥心も何も用のない相手だと私の見られましたのは残念ですね」

こんなことを薫かゐるは言いながら室へやの中を見ると、唐衣からぎぬは肩からはずして横へ押しやり、くつろいだふうになつて手習いなどを今までしていた人たちらしい。硯すずりの蓋ふたに短く摘んだ草花などが置かれてあるのはこの人らがもてあそんだものらしい。ある人は几帳の立てである後ろへ隠れ、ある人は向こうを向き、ある者は押しあけられてある戸に姿の隠れるようにしてすわっているの、頭の形だけが美しく見えた。すべて感じよく思つて

薫は硯を引き寄せ、

女郎花をみなへし乱るる野べにまじるとも露のあだ名をわれにかけめや

こう書いて、

「安心していられしやればいいのに」

と言ひ、すぐ近くの襖子からかみのほうを向いている人に見せると、相手は身動きもせず、しかもおおように早く、

花といへば名こそあだなれをみなへしなべての露に乱れやはする

と書いた。手跡は、少ない文字であるが気品の見える感じよいものであるのを、薫は何という女房であろうと思つて見ていた。今から中宮のお居間へこの戸口を通つて行くとして、薫の来たために出るにも出られずなつた人らしく思われた。弁の君は、
「わざと老人じみたことをお言いになつては反感が起るものですよ」

と言い、

「旅寝してなほ試みよをみなへし盛りの色に移り移らず

そのあとであなたをどんな性質で、お堅いともそうでないとも、きめましょう」
とも言う。

宿貸さば一夜は寝なんおほかたの花に移らぬ心なりとも

薫が言ったのである。

「私を侮辱あそばすのでございますね。自分のことではございませんよ。一般的に抗議を申し上げただけでございます」

と弁は言う。こんなふうに戯れ言も薫は長くは言っていないらしく見えるのを若い女房たちは飽き足らず思っていた。

「思いやりのないことをしましたね。あなたの道をあげましょう。とりわけて私に顔を

お見せにならない態度には理由のあることでしょう」

と言ひ、薫の立つて行くのを見て、だれもが弁のようにはしゃぐ者のように思われぬかと氣にする人もあつた。東の高欄によりかかつて、叢くさむらの中に夕明りを待つて咲きそめる花のある植え込みを薫はながめていた。何も皆身にしむように思われる薫は、「就中なかんづくは断腸是秋天」と低い声で口ずさんでいた。先刻の人らしい衣擦きぬずれの音がして、中央の室から抜けてあちらへ行つた。兵部卿の宮がそこへ歩いておいでになつて、

「ここから今あちらへ行つたのはだれか」

と他の者に尋ねておいでになつた。

「一品いっほんの宮様みやのほうの中将さんでございます」

と答える声も御簾みすの中でした。おもしろくないことである、だれであろうとかりそめにもせよ好奇心の起こつた人が、すぐにだれそれであると名ざしをして聞かれるではないか、とその女がかわいそうに思われ、また兵部卿の宮には皆よくお馴なれしていて、隠すところもなくなっているのがなんとなくうらやましい氣もする薫であつた。自由に接近してお行きになることができ、上手じょうずな技巧で誘惑をあそばされては女も負けることになるのであろう、自分にはそんなことができず、こちらの人たちとは、縁の遠いうとう

としいものになっているのが残念である。侍している人の中で、どうかして近ごろ兵部卿の宮がはげしく恋をしておいになる人を自分のものにして、あの時に自分が苦しんだような思いを宮にもお味わわせたい。聡明な女であれば自分のほうを愛するはずであるとは思われるが、こちらの考えどおりな心を持っているかどうかは頼みになるものでないと思われるにつけても、二条の院の女王が、宮のああした御放縦な恋愛生活を飽き足らず見て、自分の愛を頼むようになり、それを恋にまでなつてはならぬ、世間の批評がうるさいと思いながら友情だけはいつも捨てぬのは珍しく聡明な態度で、自分としてはうれしいかぎりである、そんなすぐれた女性はこのおおぜいの若い女房たちの中に一人でもあるであろうか、深く接近して見ぬせないように思われる、物思いに寝ざめがちな慰めに恋愛の遊戯も少し習いたいと思うが、もう今は似合わしくないと薫は思った。例の氷を割られた日の西の渡殿へ、その日のようにふらふらと薫が来てしまったのも不思議であった。姫宮は夜だけ母宮の御殿のほうへおいでになるため、もうお留守になっていて、女房たちだけで月を見ると言い、渡殿に打ち解けて集まっていた。十三絃げんの琴を懐しい音ねで弾くのが聞こえた。人々の思いもよらぬこんな時に薫が出て来て、

「なぜ人を懊惱おののうさせるように琴など鳴らしていらつしやるのですか。

（遊仙窟。耳聞猶みみにきくもなほ

きたえんしゆにみていかばかりおもしろからん
氣絶、眼見若為憐）」

こう言うのに驚いたはずであるが、少し上げた御簾みすをおろしなどもせず、一人は身を起こして、

「崔季珪さいきけいのようなお兄様がいらつしやるかしら」

と言う。その声は中将の君といわれていた女であつた。

「私は宮様の母方の叔父おじなのですよ。（遊仙窟。容貌似舅潘安仁外甥、氣調如兄崔季珪

なればなり
小妹）」

こんな冗談じやうだんを言つたあとで、

「いつものように中宮様のほうへ行つておしまいになつたのでしょね、宮様はお里住まいの間は何をしていらつしやるのですか」

思わずこんな問いを薫は発することになった。

「どこにいらつしやいまして、別にこれという変わったことはあそばしません。ただいつもこんなふうでお暮らしになつていらつしやるばかり」

聞いていて美しいお身の上であると思うことで知らず知らず歎息の声の洩もれて出たの

を、怪しむ人があるかもしれぬと思う紛らわしに、女房たちが前へ出した和琴^{わじん}を、調子もそのままでかき鳴らす薫であつた。律の調べは秋の季によく合うと言われるものであつたから、気も入れて弾かぬ琴の音であるが、みずから感じの悪いものとは思われぬものの、長くも弾いていなかったのを、熱心に聞きいつていた人たちはかえつて残り多さも出て苦しんだ。自分の母宮もこの姫宮に劣る御身分ではない、ただ后腹というわずかな違いがあつただけで朱雀院^{すざく}の帝^{みかど}の御待遇も、当帝の一品^{いっぽん}の宮を尊重あそばすのに変わりはないが、あつたにもかかわらず、この宮をめぐる雰囲^{ふんいき}気とそれとに違ったもののあるのは不思議である。明石^{あかし}の女のもたらししたものはことごとく高華なものであつたとこんなことを思う続きに薫は運命が自分を置いた所はすぐれた所であるに違いない、まして女二の宮とともに一品の宮までも妻に得ていたならばどれほど輝かしい運命であつたであろうと思つたのは無理なことと言わねばならない。

宮の君はこの西の対の一所を自室に賜わつて住んでいた。若い女房たちが何人もいる気配^{けはい}がそこにして皆月夜の庭の景色^{けしき}を見ていた。そうであつたあの人も浮舟^{きりつぽ}らと同じ桐壺^{みかど}の帝の御孫であつたと薫は思い出して、

「式部卿の宮様に私を愛していただいたものなのだから」

と独言を言いその座敷の前へ行つてみた。美しい姿の童女が略服になつて、二、三人縁側へ出ていたが、薫を見て晴れがましいというように中へ隠れてしまった。これが普通の所の情景であると今見て来た廊の座敷と比べて薫は思った。南の隅すみの間のそばで咳せき払いをすると、少し年のいったような女房が出て来た。

「人知れず好意を持つてゐる者ですなどと申せば、それはだれも言うことだとお聞きになるでしょうし、またそうした若い人たちの口真似まねをすることも私にはできません。それよりも言葉でない実質的な御用に立つことはないかと捜しております」

と言うと、その女は女王にも取り次がず、賢がつて、

「思いがけぬお身の上におなりあそばしましたことにつきましても、宮様がどんなにいろいろなお望みを姫君の将来にかけておいでになりましたかと思われまして、悲しゅうございます。いつも御親切に仰せくださいまして、お宮仕えにおいでになりました御非難のお言葉なども、ごもつともだと女王様にょおうは言つておいでになることでございますよ」

こんなことを言う。並み並みの家の娘などのように聞こえることもはばかり言う女であるといやな氣のした薫は、

「もとから血族であるためというやうなことでなしに、好意を持つ男として、何かの御

用をお命じくだすつたらうれいだろうと思います。うとうとしくお取り次ぎでお話などをしてくださるだけでは私も尽くしたいことがお尽くしできない」

と言った。そうであつたというふうに女房たちは思い、姫君を引き動かすばかりにしたはずであつたから、

「松も昔の（たれをかも知る人にせん高砂たかさねの）と申すような孤立のたよりなさの思われます私を、血族の者とお認めくださいませとおっしゃってくださいますあなたは頼もしい方に思われます」

取り次ぎの者に言うというふうにもなしに、こういう声は若々しく愛嬌あいぎょうがあつて優しい味があつた。ただの女房としてであればよい感じに受け取れたであろうが、今の身になっては、すぐに人に逢つてこれだけの言葉のみずから発しなければならぬものと思ふようになったかと考えるとこの人を飽き足らぬものに薰ようつほは思われた。容貌えんも必ず艶えんな人であろうと思ひ、見たい心も覚えたが、この人がまた宮のお心を乱す原因になることであろうと思われ、絶対の信用の持てない人は相手にしたくない氣にもなつた。この人こそは最上の家庭いけたりに生まれ、大事がられて育つた、典型的な姫君というのに不足のない人で、他に幾人いくたりもない身の上だったのであるが、自分として頼もしい女性と思われぬの

はどうしたことであろう、僧のような父宮に育てられ、都を離れた山里で大人おとなになった人が姉女王にもせよ中の君にもせよ、皆完全な貴女きじよになつていたではないか、このはない性情の人、軽々しい人と今の心からは軽侮の念で見られる人も、こうしたわずかな接触で覚えさせた感じは悪いものでなかった、と薫は八の宮の姫君たちのことばかりがなつかしまれるのであった。

宇治の姫君たちとはどれもこれも恨めしい結果に終わったのであったとつくづくと思ひ續けていた夕方に、はかない姿でかげろう蜻蛉とんぼの飛びちがうのを見て、

ありと見て手にはとられず見ればまた行くへもしらず消えしかげろふ

「あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきかに消ゆる世なれば」と例のように独言ひごひごを言っていた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
